

『源氏物語』における唐代の理想

Svambaryte, Dalia / シュバンバリーテ, ダリア

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

67

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

54

(発行年 / Year)

2003-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009927>

『源氏物語』における唐代の理想

『源氏物語』における唐代の理想

はじめに

平安時代の読者は、大和の作者によって中国の視覚、聴覚の世界に導かれていたのである。『源氏物語』の登場人物が、「唐土」の舞を舞ったり、「唐めいたる舟」に乗ったり、「唐櫛篋」を使ったり、「古言ども、唐のも大和のも」書き散らしたりする。

『源氏物語』の中には、唐詩からの引用、引喩などがエピソードの意味野を拡大してスケールを大きくし、伝奇から発想されたイメージが場面に面白みを加え、唐絵画から移ってきた映像が美の範疇を膨らませている。

ところが、受容を期待する側と受容する側とが、同じ文化背景を分け合っていないければ、コミュニケーションが望ましく進められるわけではない。したがって、漢詩文を踏まえた作者は、その理解のために求められた読者の知識に信頼がなければなら

なかった。唐文脈が当時の日本人の常識にネーティブの環境と重なっていたからこそ、含蓄、暗示を重視した物語に、和文脈と同時にヒントを提供することができたのである。

他方、全体的に見れば、引用の出典の中国および日本でのその受容の実態が大分異なっている。中国の学者趙樂姓は、日本人が「道端で死んだ人を見て、夫婦の關係に重点を置いて歌を作る。古代の中国人なら同情と同時にその原因を追求し戦争か飢饉を批判するだろう。」と、日本と中国との文学に現れる世界観の基本的な違いを強調している²。当時の日中の文化交渉は一方においては唐に対する根強い愛着と、他方においては深刻な民俗的自覚との交錯した二様の心理があった。中国から来たイメージが、日本に入ったとたん独立して、邦作者によって作られた漢詩文を初めとして新たな形で生かされた。『白氏文集』などの内容を一括りにできるほど熟知していた紫式部が唐詩にこめられた深慮を読み解くことができ、その言外の音、余

ダリア・シュバンバリーテ

韻をとどめ、ストーリーの重層的な仕組みにヒントとして織り込んでいくけれども、このような示唆は連想範囲を広げる役にすぎない。『源氏物語』の作者は、神仙譚のシンボルを大和の景物に転化させながら読者の想像力に刺激を与え知的遊戯のような挑戦に誘うが、神仙思想を伝えようという目的ではあるまい。そして、『源氏物語』の二々の齣は唐代伝奇の枠組みと似ているけれども、細部を見れば内容的には全く異なつた世界が描かれていて、日本の物語のそれぞれの登場人物は立場も心理もはるかに複雑で人間的である。『源氏物語』は日本の平安京の貴族家庭に生まれ育つた女流作家の仮名文の作品で、その内容は自国と外国の資料から撰取されたアイデアに染まりながらも、まず作者の才能と当時の日本人の文学意識から結晶化したものである。

紫式部の漢籍的な教養とその歴史的な背景

大化の改新や大宝の律令に、唐代の律令制の感化が著しかつたばかりでなく、奈良時代のいろいろな文物はほとんど唐の影響を受けて、奈良朝後期の八世紀後半から平安期初期の九世紀後半にかけての百年ほどの間は、国風暗黒時代と呼ばれているほどであった。

平安時代に入ると遣唐使もやがて廃止され、大陸に範をとつた律令制は次第に日本独特の撰撰制に移行し、文化の面でも和風が次第に確立されていった。国文や和歌が興隆して、簡単な唐詩文の模倣から、かなり自主的・国粹的になつたと言われて

いるが、事實上、唐詩の字句の利用などは、いつそう巧妙で、盛んとなつたと言えよう。特に嵯峨天皇の頃に『白氏文集』が伝来してからは、旧来の『文選』を大切にしていた文壇が、一時にこれを歓迎し、やがて元稹の文集も来て元白清新の詩文が、平安の読者を感じさせた。かつて『文選』がそうであったように、『白氏文集』は上流貴族の社会的習慣、儀礼の一種として行われる詩作に際していわゆる文学辞典となり、漢詩、和歌に典拠を与えるという役割を果たしたのである。

中国の唐初の争乱によつて旧貴族は多く没落し、それに代わつて、白居易のように、最初から中央とのつながりを持たない地方出身の科擧合格者たちは、政治的に活躍でき、中小層出身でありながら上層に昇ることも十分可能となつたのである。それと違つて、平安時代の日本には学問がほとんど貴族の特権であつた。ところが、教育は階級的に限られたものであつても、性別制限が定まらなかつた。紀貫之が女性に仮託して仮名文の『上佐日記』を書いたこと、あるいは紫式部自身が中宮彰子に『白氏文集』の楽府を進講したとき、それをこつそり読み聞かせなければいけなかつたことなどがあつたけれども、アイザック・バシエヴィス・シンガー作『愛のイェントル』において、「婦人に絵本、殿方に宗教書」という二十世紀始め頃の東欧のユダヤ人社会に育つたヒロインが学問を求めて神学校に入るために男装するしかなかつたこととずいぶん違う話である。

紫式部の家系には歌人・詩人が多かつたが、早くに母を失つた式部の文才に関しては、まず文章道出身の詩人として知られていた父為時の存在を度外視できない。当時の受領の子女とし

ての式部は、普通の教養、和歌・書・絵・音楽・香などのことを習って、一応はみなこなしていた。その女子教育内容の基本的なものの中に、漢詩、漢文の学習は入れられてはいなかったが、式部は少女のときに兄弟惟規が漢籍を習っているのをそばで聞いていて、おぼえてしまったと『紫式部日記』にある。漢学者の父親に育てられた紫式部の教養は結局男性系のもので、『白氏文集』はもちろん、『史記』、『漢書』など夥しい漢籍を読んでいたことが、視野の広さに繋がったのである。

おそい結婚の相手宣孝に急死された後、道長に求められて出仕したが、普通の女房とは違う待遇を受け、中宮彰子の教養・文化方面のことを担当させられたと思われ、中宮の話相手・相談相手でもあったようである。皇后学の一助の意味で、上東門院に、当時一般論あるいは社会への入門書としての意義があるとされている白居易の「新楽府」を進講したことは周知の通りである。

『紫式部日記』に「おまへはかくおはすれば、御さいはひはすくなきなり。なでふ女がまんなぶみは読む。むかしは経よむをだに人は制しき」と書いてある。女性が漢籍を読むことの不幸を肯定するようにみえても、紫式部自身が文章道出身の家柄から進んで漢学を勉強して一人っ子の娘に賢子という名前をつけたことから、それほど重大にも考えるべきではなからう。

『源氏物語』と唐代の思想

中国史上貴族制の最後の時代と見なされた唐王朝は、日本史

上貴族層の繁栄の時代といわれる平安朝にどこまで反映をしたのか、その平安時代の最も偉大な文学作品に触れてみれば、ある程度は理解できるであろう。

『源氏物語』はある教養の唱導を目的にして作られた作品でなく、あくまでもあらずじの紆余曲折によつて読者の興味を呼び起こそうという読み物であるけれども、その主人公たちが特定な社会の中で暮らしているから、習俗・儀式の面だけだと言つても、その社会の思想的な環境に繋がっている。そういう意味で、『源氏物語』の作者が生まれ育つた平安の貴族思想は、むしろ仏教的であつたから源氏物語観も基本的にそうだと言えよう。しかし、それに絡んだ儒教・道教の影響もないわけではない。唐代に特に重用されて盛んになった詩文は、儒教的教養を身につけた士大夫の必修教養であつた。逆に言えば、詩文が出来るということとは、儒教的教養を身につけていることを意味した。日本で愛読された白居易自身、あらゆる儒教の經典に通暁しなければならなかつた科挙への受験に應ずるためにかつて異常な努力をしたが、つぎつぎと新しい思想にも関心を示し、相反する思想がその内心において同時に共存することができた。

白居易の「長恨歌」は、楊貴妃の五十年忌に当たる元和元年に鎮魂の意を込めて完成させられたと思われ、玄宗が方士に楊貴妃の魂を尋ねさせたという神仙譚を含む。『源氏物語』の作者は敢えて「長恨歌」の劇的な要素を排除し、追慕などの叙情的な部分を、神仙思想の世界として取り入れようとしているのではないか。「かぎりとして」の桐壺更衣の歌と「たづね行く」の帝の歌は場面が違ふと言つても、明らかに唱和になつてい

て、幽明界を異にする二人の唱和が「長恨歌」に漂う寂寥たる情趣を見事に映しながら着想された可能性が高い。

中国の廬山の風景は白詩によって平安人に知られていたが、「若紫」の巻に登場する北山が非日常的な仙山として描かれているのは、仏教の中心でも仙山でもあった廬山に関係するであろう。北山の描写の中で明石の入道とその娘の話題が出るころも、物語の構想という点で重要であり、廬山をめぐる逸話の中に廬山の神・廬君と人間の女との結婚譚があり、著しく明石の人道の場合と似ている。

こうして『源氏物語』の登場人物の意識とその作者の出身階層の信仰には、儒教・道教が部分的にとどまっていたが、それより根を下ろしたのが仏教の思想である。

中国は卑近な道教がだんだん盛んになった時勢でも、仏教が完全に衰退したのではなく、禪宗の形で栄えた。それに対し当時の日本は、浄土教の影響が著しかった。ところが、藤原時代における浄土思想の展開への、白居易による影響も見逃せない。白居易はその職務上の経験をもとにして、社会的問題やそこに内在する病弊などを詩の対象として取り上げたが、平安時代の摂関政治下において、私領を領有しない多くの中下級の官人たちは、国家財政の行き詰まりとともに次第に困窮の一途を辿り、その過程において、一部の文人の中には、現実社会の批判を通して、浄土教へ向かう者が輩出した。

浄土思想発展への心理的動機には、日本の上流貴族も全く無関係であることはありえなかった。光源氏像の創造なども、古代国家における末期的状態の貴族の内心の苦悶の隅々にまで光

を当て、これをあますところなくさらけ出してみせたものであり、晩年の光源氏がいかに荒涼たる人生を体験したかは、よく知られているところである。

『手習』の巻に横川僧都が小野に立ち寄り、出家させた浮舟を教え励ます条がある。その際に、僧都が白詩の「陵園妾」を踏まえて、陵園の妾の運命を憐れむ気持を、もつと深い人性的な意味に転化しながら、「命は、葉の薄きがごとし」と、老少不定の世の中について語り、その次に「松門に曉に到りて月徘徊す」と、朗詠する。作者の紫式部によって、のちに仏教歌謡にきわめて接近した「朗詠」のありようを先取りした場面設定が行われる。式部は、禪とそれから晩年に次第に浄土教に傾倒した白楽天の詩を念頭において書いているが、それをまず物語の構想に従わせる。

新間一美氏の意見では、平安の文人によって、組の物語として意識された「長恨歌」や李夫人説話も浄土思想を背景に読まれていた。『源氏物語』の結末では使いの小君を拒絶する浮舟が、楊貴妃と玄宗の輪廻転生を否定した。方士の還奏を受けても嘆き悲しむ玄宗の姿を写している薫は、仏に接近しようとしながら却って惑い続ける者として、「夢浮橋」の向こう側に行つてしまった浮舟と対比的に描かれている。

『源氏物語』と唐詩

『源氏物語』は日本の『伊勢物語』や『古今和歌集』を数多く引用したと同時に、中国の『史記』のような作品も強く意識さ

『源氏物語』における唐代の理想

れ、当然ながら漢詩もその表現に利用された。当然ながらといつても、詩歌が文学の中でいちばんプライベートな性質をもっている部門で、それを読む者がそれを作った者と同じ言葉、同じ経験、同じ生まれ育ちの環境でなければ、その奥に宿っている趣旨に行き渡るはずもないと考えられる。しかし、日本の平安時代の文学には、他国である中国で書かれた詩を語義上引用するだけでなく、特に『源氏物語』においてはその最もしみじみとした雰囲気をごよなく伝える例がしきりに出てくる。一方、その平安時代の貴族は、なぜ中唐期に当たる白詩に一番憧れていたかと考えてみれば、白居易の古詩が小説的な構成を持つていることにこそ原因があるかもしれない。「長恨歌」は口から耳へ、耳から口へと伝わるような、口語的で極めて大衆性のある作品であり、それが古くからの民間叙事詩的詩体であると指摘されている。外国文学の移植に際しても、叙事詩が抒情詩より受け入れられやすいと言ってもよいのではないか。

なお、日本には始めから白楽天の人格に対する深い理解や共感が発現しなかつたら、そういつた大規模の白詩の摂取が不可能であつたらう。「詩魔」と自称した、忠臣・道学者・隠逸・通人・才人など多面の性格をもつていた白楽天の思想と人生が、『白氏文集』を通じてよく知られており、彼は個性的な文学者として、そして個性的な人間のモデルとしても見上げられていた。中国の文人たちは同時に学問にも通じていたが、その本業といえるものは、あくまでも官僚としての職務であつて、決してそれほど自由な身ではなかつた。平安の中級の文人貴族層は、同じく文人、学者、官僚の三者を兼ねた存在であり、特

にその官僚的心情の共通性が、白居易文学盛行の一端を担つて¹²いる。

ともかく、朝鮮に伝わり日本に早く渡来して写し継がれ訓点を付された白居易の詩文集は、その平安の貴族社会の読者によつて単に「文集」の名で愛読され、光源氏の須磨流謫に當つても、これが忘れられずに携行されているのも自然のことであつた。

白楽天の諷諭詩、閑適詩、感傷詩、雑律詩など、それぞれの詩想が活かされつつ日本の文学に織り込まれ、大和の作者がその詩句を徹底的に把握することができ、あるいは原詩の真意を無視しても時々に応じて自分勝手にその一語一句を取り出せたという事実は、唐代の大陸文化が理解に障壁のない領域になつてきたことを明らかにするのである。

紫式部は、「長恨歌」の男女の愛情を扱つた点について強い関心を持つたから、その哀史を『源氏物語』の開幕に利用した。ところが、帝と桐壺更衣の物語には、白居易の詩が一つの原典になつているが、唯一のではない。男女の恋が子供の誕生へくり広げられたが、それは李夫人の故事から直接取り込まれた要素であらう。玄宗と楊貴妃、武帝と李夫人は「嬖惑」という点で同等に扱われ、その意識は宇治十帖にも見られる。「桐壺」の巻と「長恨歌」の関係を別の視点で論じると、玄宗が求めた楊貴妃の靈魂に代わるものは生きた藤壺であり、更衣の忘れ形見は光源氏である。楊貴妃の靈魂は一度見出されれば、それで物語は終結せざるを得ないが、この世にとどまる二人の身代わりはこの宮廷社会に新たな物語を生み出して行く。

漢詩というのは、ロマンチックな恋をそのまま唱える例があるけれども、その伝統がよほど薄く、それより男性同士交友を中心にするものが圧倒的に多い。紫式部も、須磨での光源氏と都から訪ねてきた頭の中將との二人の親友の再会の場面を構成するときに、元白詩をもとにしながら、実在の江州左遷を解かれて忠州に向かう白居易と、やはり左遷を解かれて北へ向かうその親友の元稹の旅の途中の再会のありようを想起させる¹⁴。ところが、恋に対する軽蔑がなかった平安の環境からできた『源氏物語』では、交友の表現が、男女の恋の思いの表現に置き換えられている場面もいくつも見出せる。たとえば、藤壺などの都の女達の心を思いやる須磨退去の光源氏の姿の描写には、江陵に左遷されている元稹と、長安の宮中で一人宿直してその心を思いやる白居易との唱和詩の景物が利用されている。「二千里」を隔てた、唐代の親友同士の間と、平安時代の恋人同士の間に通い合う心のあり方が重ね合っている。そして紫式部は、「深夜の月」「朦朧たる月」のイメージを含む『千載佳句』春夜部にある二首を読み、それらに引かれた白詩ばかりでなく、その先駆けとなった唱和詩相手の元稹の連作をも丁寧に読んだけれども、男同士の交友に拘らずに、光源氏と朧月夜の君とのロマンチックな出会いを設定した。

漢詩全体に恋愛のモチーフが割合と少ないとすでに述べたが、愛しい人と別れ悲しむテーマがかなり認められていて、「長恨歌」も、恋より恨みの歌である。

夫より先立つた妻が雨となり雲となったという表現が、もともと巫山の女神の故事を踏まえた『文選』の宋玉の「高唐賦」

に見えるが、愛人を悼んだ劉禹錫詩の二首の絶句中にもあって、光源氏と頭の中將が夕霧を生んで死去した葵上を偲ぶ場面にもある。葵上を亡くした光源氏には愛人を失った劉禹錫像が投影しているが、その背景に左遷の直前、若い妻と死別した元稹の姿も浮かんでくる¹⁵。

『源氏物語』における唐詩は、構想の次元では部分的であつても、表現の次元ではかえって多量である。唐詩の美辞佳句をよく覚えた紫式部の語でも、漢語を和訓に馴化したものが予想外に多い。白居易の「琵琶行」には、琵琶の音を鳥の囀りの言葉のように描くところがあり、田舎の音楽を描くところもある。「松風」の巻には、光源氏が形見に残した琴を演奏する明石の君の「故里に見し世の友を恋わびてさへづることを誰か分くらむ」との歌に琴の音色を鳥の声のように表現しながら、都を離れ明石で育つた自らを卑下しているのである¹⁷。

女三の宮によつて生まれた薫と対面する源氏は、この晴れがましい光景の中で、「静かに思ひて嗟くに堪へたり」と、『白氏文集』自嘲の一節にその心情をこめる。白楽天が、五十八歳にして子を得たとき詠んだ詩で、その主意は「静思堪喜亦堪嗟、すなわち、喜びが半分、嘆きが半分というところにある。しかし、紫式部はここで、源氏に、「堪喜」の部分を除いて朗詠させることによつて、この口ずさびを聞く者は、詩句の背景から、「堪喜」の部分を取り払った源氏が悲痛な思いだけを内包させることを得るであろう。さらに白居易の詩中の「五十八翁」を呼び出すことによつて、源氏が年老いてからの子供の出生に少々当惑していて、しかも自らの老いの自覚をしている

『源氏物語』における唐代の理想

という心情もみられる。また「似汝翁」を思い出すことによつて、自らと薫の似ないこと、そして、この子が柏木と似た運命を辿るのをおそれる心情を捉えることができる。¹⁸

『源氏物語』には、おぼろ月の場合のように、新しい表現を仮名文学で紹介して文章を肥やしたというような装飾役の漢詩的なイメージも摂取され、「夕顔」の巻に聞こえてくる衣をうつ砧の音が、柔順な女の虚像の裏に不幸な「思婦」の実像を浮かび上がらせるというような、連想役の白居易的な景物も採用された。漢詩的な世界の内情に明るい紫式部は、その素材を目的としてではなく目的を達する手段として創造的に借りることができた。

平安文学全体における白居易の諷諭詩の引用を分析すると、故事先例・叙情・叙景のための利用が大半で、諷諭そのものの採用はかなり少ない。²⁰ところが、時事を諷諭する「新楽府」を中宮に読み聞かせた紫式部は、『源氏物語』に感傷詩を利用したが、閑適詩を評価せず、諷諭詩を第一としてその思想をまるごと理解して自分の作ったキャラクターを通じて伝えることができた。光源氏が世間の迷惑になる六条院への行幸を冷泉帝に諦めさせようとしたエピソードには、「驪宮高」という白詩のテーマがそのまま読み取れる。更衣の死を嘆く帝に対する人々の批判は過度の寵愛への批判とともに、諷諭詩の作者の目を通して描かれている。更に「蛩」の巻の物語論には史実を踏まえながら物語詩という虚構の世界を再構成することによつて諷刺批評を加え詩人の人生観を盛りこむという、「新楽府序」を初めとする白氏の文学論が影響を与えていて、それが延いては

『源氏物語』を古物語から脱皮させたのだ。²³ 村井利彦氏は、『源氏物語』を「巨大な諷諭詩」とまで呼んでいる。

『源氏物語』と唐代の物語

前述の通り、白詩じたいが小説的な構成を持つているけれども、そこには唐代伝奇が盛んに作られた時代の背景もある。その伝奇は日本にも渡来して平安で読まれ、新しい文芸運動として式部の関心の範囲内にも入っていたと考えられる。

平安時代に長恨歌物語が白詩の「長恨歌」のみならず、その解説の意味に近い陳鴻の『長恨歌伝』、樂史の『楊太真外伝』、『旧唐書』などを資料に、物語表現として形成された。平安時代の通行本を鎌倉時代に写した『金沢文庫本白氏文集』所収「長恨歌」の「伝」と比較すれば、『源氏物語』のテキストに直接の引用が少ないけれども、当時の訓読に従って巧みに言い換えられた句をあちこち見つけることができる。²⁴

「蜻蛉」巻に、法華八講が終わった後、薫が女一の宮の様子をかいま見る場面がある。その視線が女一の宮の姿態に釘づけにされているが、彼女の前にいる人々は「まことに土などの心地ぞする」とある。楊貴妃の美を際立たせるように、「長恨歌」が、「六宮粉黛無顔色」と詠んでいるのに対し、「長恨歌伝」が、「左右前後ヲ顧ルニ、粉色土ノ如シ」と語っている。『源氏物語』の作者がここで「伝」に触れていると明らかに見ることができ。

『源氏物語』に対する唐代伝奇の影響は、このように「長恨歌

伝」の喩えが和訳されたり、同じ「蜻蛉」巻において薫と中将のおもとの問答に張文成の『遊仙窟』が引用されたりするように直接的でなくても、その技法の応用の意味で与えられたと言える。

「帚木」の巻の冒頭では、語り手が有名人の光源氏の名を汚すような内緒ごとを語り伝えた者を非難し、「夕顔」の巻の末では、物語の聞き手あるいは読み手の要求によってよけいなおしやべりをしてしまったと、語り手が反省している。鈴木日出男氏によると、このような場面には、作者がひとたび世俗的な語り手に扮する。作者ならざる語り手の設定によって、語り手と聞き手（読者）とが共同しあうような形は、『源氏物語』だけでなく、『伊勢物語』にも『万葉集』の長歌に付せられた短歌にも見える。²⁵しかし、そこには唐代伝奇の作者自身が作品誕生のいきさつなどを説明する文章が影響を与えた可能性もあろう。

『源氏物語』は人物・事件は基本的に虚構であるが、その表現には史実を織り込み歴史を語るスタイルがとられている。「桐壺」の巻の冒頭は「いづれの御時にか」と始まる。一見漠然とした表現のように見えるが、単に「昔」というのではなく、平安時代の特定の天皇の治世をさしている。そして光源氏の元服を公的行事の記録として、それに続く結婚の儀式まで宮廷史の歴史記録らしく記述している。その歴史性は『長恨歌伝』や同類の唐代伝奇の源氏物語への顕著な影響である。

沈既済の『任氏伝』は人間の男と狐が化けた女との純愛の物語である。比べてみると、「夕顔」の巻では身分を隠している

光源氏と素性の知れない女との出会いから物語が始まる。

更に「空蟬」の巻は基本構想を『任氏伝』から得たと思われるほど、共通点が多い、と新間一美氏が論じている。任氏の物語において、狐の貞潔・艶色の成め・死別の恨みという三主題があり、全て帚木三帖の主題に反映していた。²⁶

世界最古の完成された長編小説としての『源氏物語』は唐代伝奇の仕組み、特にその史実を織り込んで語るという方法を取り入れて、唐代伝奇にはない長編としての成長を遂げたと言える。

『源氏物語』と唐絵

中国へ一遍も旅行していなかった中古の日本人が、洛陽と長安を做つて碁盤目のように整然と区画していた平安京を歩いた時や、呉道子の淡彩の新画風をもつばら研究したと言われている巨勢金剛の屏障画を見た時などに、唐人人の好みの物、彼らを囲んだ風景そして彼らの都市の名所などを生き生きと想像できたと言つても言い過ぎではあるまい。紫式部も、『源氏物語』の風景に中国の景物を自然にはめこんだり、その人物に唐代風の服装を着せたりすることを通して、唐風的美を味わわせている。

『源氏物語』の視覚的な背景において、作者はその主人公の容貌、衣裳などだけでなく、それぞれのシーンの大道具にも比重をおくのである。たとえば、「胡蝶」の巻に光源氏が玉鬘に意中をうちあけに向かう場面があるが、この場面には、作者が四

『源氏物語』における唐代の理想

月の景物を設定し、源氏に「和してまた清し」という『白氏文集』の一節を朗詠させることで、以下に続く恋の場面の見事なプロローグとしているのである。

光源氏がもう一人の女性と出会ったのは、なまめかしい朧月の夜のことである。冴え冴えとした和歌の月ではない。「明ならず闇ならず朦朧たる月」は、白居易的、漢詩的な美意識の世界を甦らせている。

唐絵というのは前大和絵的なものである。漢詩と同じように、最初は外来のものにの称にほかならなかつたのであるが、やがて邦人の作にして、平安朝ごろの大和絵に対して、これとは異なつた題材、様式の異邦的な画を唐絵と称したのである。唐絵の本質的内容は、外来画の影響の強かつた奈良、平安兩時代中ごろまで存在したのであろうが、その時以来国粹的な風潮の盛んとなるにつれ漢字の草体が草仮名に変わったように、これを大和絵化した。しかし、日本と唐土との交渉のあつた古い時代の史実を、あるいは中国の物語を絵巻や障屏画にした場合には、唐土の風物が現れるから、藤原時代にも唐風の絵が描かれることとなる。そして仏画でも、インドの風でもなければ、日本の様子でもなく、ほとんど唐風に描き表されている。

『源氏物語』の「帚木」の巻には、「人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚の姿、唐国のはげしき獣のかたち、目に見えぬ鬼の顔などおどろおどろしく作りたる物」について書いてある。これは、「絵所」、つまり宮廷に行われた公共的な作品について記したものであるが、更に進んで平安朝の貴族の間に賞玩されていた唐絵を見ることができ、「絵合」の巻には、「長

恨歌』『王昭君』などやうなる絵は、おもしろく、あはれなれど、事の忌あるは、こたみはたてまつらじ」との記述がある。この「長恨歌」「王昭君」の絵は、中国画の様式をよく踏襲して日本人の手によつて描かれた模本である。内裏造宮のたびごとくに描かれた賢聖障子や荒海の障子などのようなものもそれである。²⁹⁾

参議になつた頭中将が須磨を訪れたとき、そこに退去した光源氏の住まいは極めて中国的なものであつた。山水屏風に描かれたような、竹を編んで垣根をめぐらした山居の石の柱、松の柱が、明らかに白居易が廬山の遺愛寺の畔に構えた草庵を思い出させている。實際上、「須磨」の巻の情景のすべてが白居易の江州左遷と関わっている。『源氏物語』の作者は、光源氏と京から訪ねてきた頭の中將の再会に元白の友情を持ち込むように、その場面を白楽天の詩句で表現化させて、唐絵のような風景で視覚化させている。

少女期でも理屈が通りすぎるくらいはつきりした歌を詠んでいた紫式部は、こういつたような中国の美の觀念に通じた自然物・既製品などを、冷静な計算の下で物語の中に配置し、その構想に従わせているとも言える。

結び

「風車」が『ドン・キホーテ』の文脈からもつと広い意味を引き出してくる。平安の漢詩文に通じた者には、「白い扇」が同じように、単なる小道具でなく、男の女への愛の薄れ行くこと

を象徴したイメージとしても理解されていた。「To Be or Not To Be」といったつぎに何がくるか、英語のネーティブ・スピーカーでない人までもよく知っていて、おそらく注解をつけて説明したりする必要もない。白楽天に詳しい読者も、「忽聞水上琵琶声」の句が何の話を引き起こすか、翻訳なしでもよくわかつていたのであろう。

悲惨な運命を受けながらも、禁令に背き戦死した兄弟を埋葬したアンティゴネが、古代ギリシャのソフォクレスの悲劇にも、ドイツのブレヒトの脚色にも、フランスのアヌイの劇にも、強い意思をもった、呪われた家族の娘として登場する。同じように、楊貴妃の女性像は、白居易の「長恨歌」であれ、能の「楊貴妃」であれ、『源氏物語』の「桐壺」の巻の暗示であれ、皇帝の寵をもつばらにし、反乱により処刑され、慰めようのないほど悲嘆にくれた皇帝がその魂を探し求めるというような筋道の中で描かれている。

もともと地理的および文化的に接点もない国々にも、同じ発想をもとにされた文学作品、またその作品に描かれているキャラクター型が似たような形で現れる例が、探してみればかなり多く見つけることができる。継母が継娘をいじめるという話は、シンデレラから『落窪物語』まで、古くから広く伝えられていたことも、好色の光源氏が西欧の読者に日本のドン・ファンとして紹介されていることも、その証拠になりうるであろう。

『西遊記』などを読んだこともない一般の西欧人にとって、中国の文学が今でも未開地なのに、ギリシャの神話がその考え方

には却って一国・一時代の限界を越えて異色が褪せた、身近なものになっている。平安の現実には、唐詩・唐絵・唐物などが、おそらく異文化のエキゾチックな品類としてでなく、なじみ深いものとして認識されていた。もちろん、中国の物を介してこそエキゾチックさを伝えようとする場合も多かったが、それもむしろパターン化して読者に簡単に想像し、解読できるコードとして定まっていた。

教養の内容は時代や民族の文化理念の変遷に応じて異なる。中世ヨーロッパの国際語としてのラテン語は学界でも文通でも使われていたように、中古極東の共通語が中国語であった。平安のインテリの意識に、「世界文化」に等しかった唐代文化の記号類の意味が自然に解け、教養を高めた人々によって母語のように簡単に読み取られていた。先進国の魅力に惹きつけられ、言葉と同時にその理想も美意識も世界文化として受け入れられていた。

平安時代の日本まで広がってきた世界文化は、隣国そして先進国である中国に限られていたとまでも言うるのではないか。朝鮮の文化と取り混ぜられてそれを媒介にして摂取されたものなどでも、基本的に漢・唐文化を代表していた。中国固有の宗教でない仏教や、それに関連している火葬のような習俗も、中国人の観点でとらえて中国経由で日本に及んで来た。

ところが、異文化といつても、中国文化財は当時、日本人の意識に異質じみた、部外のものとして受け入れられていったわけでもない。むしろ日本文化じたいが育った基盤の一部として理解され、自然に邦文化の分野に入っていたから、自分のも

『源氏物語』における唐代の理想

のとして自由に扱われていた。従つて、その文学から源をとるヒントが中古日本の読者にスムーズに通じていて、作者の訴えた暗示が読者に相応しく応じられていた。それで、『源氏物語』にみられる『白氏文集』をはじめとする中国人によつて書かれた唐詩の影響を、日本人の詠んだ和歌のそれに、そして日本の神話の影響を、中国の伝奇のそれに等しい意味で捉えるのが当然であろう。

まとめて言うと、日本固有の文学ジャンルである物語の王と呼ばれる『源氏物語』は、その作者の天才によつて実らせられた作品で、独特の性質をもっている。その中にある引用などが、イメージを豊かにする装飾として使用されている場合はもちろん、内容的に重要な役割を果たしたと言える場合でも、点火のような刺激にすぎない。ストーリーの自動車が一応始動すれば、そのエンジンが他力によらず物語の内面的な条理に適つてかかっている。また、紫式部の『源氏物語』を巻々にそつて行けば、先へ進むにつれて外から入つた元素が少なくなるのであろう。比較してみれば、芥川竜之介の短編小説の中には、『今昔物語』の説話であれ、ゴーゴリの短編であれ、完全に原文のストーリーのパターンを追つていながら最後まで同じプロットが展開させられていくようなものがかなり多い。ドストエフスキー作『カラマーゾフの兄弟』の意地悪婆が「蜘蛛の糸」の韃陀多と化してきても構想の本質そのものがかわらない。こういった場合には、海外の作品がヒントよりも、模範になつている。『源氏物語』はそうではない。

他方、世界の古典傑作のどちらとも同じように、『源氏物語』

じたいが次々の世代にとつてアイデアの源泉となり、想像力を濃くしつつ美術、演劇、映画などの構想のインスピレーションとなつている。話をずらせば、能は「夕顔」「野宮」などの筋をそのまま借りて舞台化したのでなく、相当な文学知識を分け合つている観客を相手に、あるエピソードに潜んだムードあるいは余波になつた感情を際立たせて、あらためたレベルで感情を交わしている。六条御息所と葵上のドラマのきつかけとなつた牛車の場面が周知の事情とされてきて、漸く謡曲の「葵上」から消えたこともその実例とでも言えよう。『源氏物語』における唐代の文学の影響がいかに類似に考えられるのではない

注

- 1 紫式部『源氏物語』（『日本古典文学全集』二二―一七、小学館、一九七〇―一九七六）、渋谷栄一『源氏物語の世界』（<http://www.sainei.or.jp/~eshibuya/>）等。
- 2 坪井佐奈枝「中国における日本古典文学の翻訳と研究」（『和漢比較文学叢書』第十八巻、一九九四）
- 3 下店静市『唐絵と大和絵』（『下店静市著作集』第七巻、講談社、昭和六十一年）
- 4 丸山キヨ子「弘徽殿太后と藤壺中宮」（秋山・木村・清水編『講座 源氏物語の世界』有斐閣、昭和五十六年二月）
- 5 太田次男『中唐文人考』（研文出版、一九九三）
- 6 西脇常記『唐代の思想と文化』（創文社、二〇〇〇）
- 7 森岡常夫『源氏物語と長恨歌』（『文芸研究（東北大）』第百号、昭和五十七年五月）

- 8 藤井貞和「光源氏物語の端緒の成立」(『文学』第四十卷第一号、昭和四十七年一月)
- 9 新間一美「源氏物語と廬山——若紫卷北山の段出典考——」(『甲南大学紀要 文学編』第五二号、昭和五十九年三月)
- 10 注5太田前掲書。
- 11 青柳隆志「源氏物語における朗詠と催馬楽」(『源氏物語研究集成』第九卷、風間書房、平成十二年)
- 12 注5太田前掲書。
- 13 久保田孝夫「光源氏物語の長恨歌引用の表現——李夫人・子の存在・独詠歌——」(南波浩編『王朝物語とその周辺』笠間書院、昭和五十七年九月)
- 14 天野紀代子「交友の方法——沈淪・流謫の男同志」(『文学』第五十卷第八号、昭和五十七年八月)
- 15 新間一美「元白・劉白の文学と源氏物語——交友と恋の表現について——」(『源氏物語と漢文学』汲古書院)
- 16 小島憲之「漢語の中の平安佳人——『源氏物語』へ——」(『文学』第五十卷八号、昭和五十七年八月)
- 17 新間一美「源氏物語と白詩——明石巻における「琵琶行」の受容を中心に——」(『源氏物語の和歌と漢詩文』第九卷、平成十二年九月、抜刷)
- 18 注11青柳前掲論文。
- 19 天野紀代子「砧の女と鼻の院」(『和漢比較文学叢書』第十二卷、平成五年十月一日、抜刷)
- 20 小守郁子「源氏物語と白氏文集」(『東方楽』第六一輯、昭和五十六年一月)
- 21 注19天野前掲論文。
- 22 新間一美「李夫人と桐壺卷」(『論集 日本文学・日本語』二中古、角川書店、昭和五十二年十一月)
- 23 丸山キヨ子「古典の受容と新生——紫式部と『白氏文集』——」(川口久雄編『古典の受容と新生』明治書院、昭和五十九年十一月)
- 24 田中隆昭「中国文学と源氏物語」(『源氏物語研究集成』第九卷、風間書房、平成十二年)
- 25 鈴木日出男「源氏物語への道」(小学館、一九九八)
- 26 新間一美「もう一人の夕顔——帚木三帖と任氏の物語——」(『論集中古文学五』源氏物語の人物と構造』笠間書院、昭和五十七年五月)
- 27 注11青柳前掲論文。
- 28 天野紀代子「出会いの演出——朧月夜と夏の海辺」(『国文学』平成十一年四月号)
- 29 注3下店前掲書。
- 30 注14天野前掲論文。
- 31 黒須重彦「班婕妤と夕顔」(『文学』第五十卷第二号、昭和五十七年二月)
- (*Dalia Saambyrne* リトアニア ビリニュス大学助教授)
- *法政大学のH I F 招聘研究員として、二〇〇二年四月から半年間、日本文学科に在籍・研究。